若林正丈編『台湾総合研究Ⅱ―民主化後の政治―』調査研究報告書
アジア経済研究所　2008 年

第２章

新興民主主義と腐敗
―陳水扁政権期の腐敗分析への予備的考察―

松本充豊

要約：
台湾の陳水扁政権では，とりわけ二期目以降，次々と金銭スキャンダルが発覚した。陳水扁政権と民進党の腐敗ぶりや，当初のクリーンなイメージとその後の現実とのギャップは，あまりに衝撃的であった。そのためか，ここ数年間に，新興民主主義国・台湾では腐敗が拡大したような印象を受ける。それはメディアの報道が増えたことや，台湾住民の腐敗に対する眼が厳しくなったためなのか。そうした印象が実質的な変化を反映しているとすれば，腐敗が拡大した背後にある要因とは何なのか。それはまた台湾の新興民主主義にどのような影響をもたらすのか。本章では，近年の腐敗のめぐる議論を整理して，陳水扁政権期の腐敗の問題に取り組むための準備作業を行う。

キーワード：　台湾，腐敗，新興民主主義

はじめに

台湾の新興民主主義も腐敗とは無縁ではない。台湾の陳水扁政権では，次々

と金銭スキャンダルが発覚した。陳水扁政権は，腐敗とのかかわりでいえば，２つの意味で衝撃を与えたといえる。第１に，陳水扁はクリーンさをアピールし，腐敗や金権政治の打破を真正面から掲げて，台湾で初の政権交代を実現させたことである。第２に，現職総統のファースト・レディとしては初めて，陳総統の呉淑珍夫人が「国務機要費」とよばれる総統府機密費の流用疑惑で起訴されたことである。陳水扁総統は，総統特権により在任中の起訴を免れたものの，退任後に起訴される可能性が残されている。このほかにも，陳水扁政権では，2004 年からの二期目に入ってからというもの，民進党の閣僚や国会議員などの金銭スキャンダルが繰り返し明るみに出た。クリーンを売り物にした政権が腐敗に塗れてしまった。民進党のイメージも「クリーンな民進党」から「腐敗した民進党」へとすっかり変わった感がある。さらに，いわゆる「首長特別費」問題[1]では，地方首長経験者である与野党の大物政治家が容疑の対象となった。2008 年総統選挙の候補者となった民進党の謝長廷，国民党の馬英九もその例外ではなく，一時はいずれの候補者もいつ出馬資格を失うかわからない状況に陥った。

いずれにせよ，陳水扁政権と民進党の腐敗ぶりや，当初のイメージとその後の現実とのギャップは，あまりに衝撃的だった。そのためか，ここ数年間に，新興民主主義国・台湾では腐敗が拡大したような印象を受ける。それは，メディアによる関連報道が増えたことや，台湾住民の腐敗に対する眼が厳しくなったからだけなのか。もしそうした認識が実質的な変化を反映しているとすれば，腐敗が拡大した背後にある要因とは何なのか。また，それは台湾の新興民主主義にどのような影響をもたらすのか。

以下では，こうした問題に取り組むための準備作業として，欧米での研究業績を中心に近年の腐敗のめぐる議論を整理して，陳水扁政権期の腐敗の問

[1] 台湾での「首長特別費」というのは，行政首長に給与の他に支給されるもので，一種の交際費だが，交際費は別に項目がある。国民党総統候補の馬英九は一審・二審で無罪判決を受けた。民進党総統候補の謝長廷と副総統候補の蘇貞昌は起訴されなかったが，民進党の呂秀蓮副総統と游錫コン民進党主席，陳唐山国家安全会議秘書長が起訴された。陳水扁総統の国務機要費事件と一連の特別費事件とは同様の問題といえる

題を理解するための一助としたい[2]。まずは，陳水扁政権下で金銭スキャンダルが続出した背景的要因を考察する。次に，近年腐敗に対する関心が国際的に高まる中で，新興民主主義国で腐敗を生み出す要因，あるいは腐敗が各国の政治・経済システムに及ぼす影響について，どのような議論が行われているのかを概観する。さらに，台湾を含む東アジア諸国における腐敗が，他の地域のものと異なるのかどうかを考える。最後に，今後の課題について示す。

Ⅰ　スキャンダルが続出した背景

腐敗とは，一般に政治家や官僚が個人の利得のために公職を違法に濫用することと定義されるが，腐敗と思しき行為は，どこの国にも，どの時代にも存在するものである。台湾のような新興民主主義国では，第１に，そうした行為の存在が明らかにされるのか，第２に，そうした行為が腐敗と看做されるのか，が問題となる。

第１の問題とのかかわりで指摘されるのが，民主化に伴うメディアの自由化である。腐敗と思しき行為に関する「情報」の公開が進むことになるし，不正行為やスキャンダルに関する報道が増加する。メディアが国家の統制から解放されたことで，取材能力に優れたジャーナリストが，そうした行為を暴露しやすくなった。台湾では，一党独裁政権下でひた隠しにされてきた秘密が，大衆の眼の前にさらけ出されることになった。

第２の問題については，市民の意識の高まりが重要である。近代化と「腐敗はよくないもの」という普遍的な価値が広がったことで，より多くの市民が，それまでは受け入れていた行為や事象に腐敗のレッテルを貼るようにな

---

2 現時点で，台湾で発表された陳水扁政権期の腐敗を扱った研究して確認できているのは，薛朝勇の研究（Hsueh, Chao-yung, [2007]）のみである。この論文は，台湾の腐敗についての先駆的研究といえる。ただし，民主化以降に台湾で腐敗が深刻化した理由，腐敗と民主化との関係，腐敗が政府に対する信頼や民進党の正統性にもたらした影響，さらには台湾が腐敗の抑制にどう取り組むべきかなど，多岐にわたる問題を扱っているため，それぞれの問題について踏み込んだ分析が行われていない。以上の事情により，本章では欧米で発表されている研究を中心に議論を整理した。

った。要するに，市民の腐敗であるという認識の基準が高まったということである。ただし，すべての市民がそうであるとは限らない。今までどおり，腐敗と思しき行為をそのまま受けいれてしまう者もあろう。

さらに，民主化に伴う制度化も重要である。腐敗と思しき行為があったとしても，それを腐敗であると認識し判断する市民の基準と，処罰の対象となる違法行為であると断定する司法の基準とは異なる。民主化によって，不正行為や腐敗の防止対策のための既存の法律や制度が機能し始める，あるいは新たな法律や制度が整備されることで，これまで不正と看做されなかった行為や事象も違法であるとして処罰の対象となろう。

ただし，以上の諸要因は，台湾のみならず，新興民主主義国一般に指摘できることである。特に陳水扁政権期についていえば，初の政権交代という要素が重要だったと考えられる。例えば，「民主主義の回復（the return of democracy）」が軍事政権の民政移管という途を辿ったラテンアメリカでは，各国で民政移管後の軍部の影響力には違いがあるとはいえ，民主化の過程がある種ドラスティックな形で進展した（Haggard and Kaufman [1995]）。これに対し，台湾の民主化が国民党政権の下で漸進的に進められた。国民党にはそれだけ時間的余裕が与えられ，台湾の民主主義のあり方にも影響を及ぼすことができたのである。メディアの自由化が進む一方で，国民党はメディアに対する一定の影響力を保持し続けた。司法改革の遅れも指摘されていた。政権内部に腐敗と思しき行為や事象が存在したとしても，すべてが徹底的に暴露されたわけではないと考えるのが自然であるし，関係者がそれなりに策を講じて，うまく立ち回った部分も少なくないであろう。しかし，そのような関係者は政権交代によって，関連した「経験」と「知識」を持って政権を離れた。

他方，民進党は政権交代により初めて政権を握った。陳水扁政権下では，当初から政府関係者の経験不足や力量不足が指摘されていたが，こうした点は腐敗の問題を考える上でも重要であると思われる。国民党政権期から政権内部に存在した腐敗と思しき行為や事象は，一種の前例や慣例として継承さ

れたと考えられる。前政権期に不正や腐敗と指摘されたり，断定されたことがなかった以上，民進党の政府関係者が自己診断することもなかったにちがいない。むしろ,「国民党によくて，どうして民進党にダメなのか」といった意識から，より「積極的」に腐敗と思しき行為に関与した関係者もあるだろう。その場合にも，国民党のような長年の「経験」を持たない民進党では，関係者のそうした行為も「洗練」されたものではなかったと思われる[3]。

こうした背景の下で,陳水扁政権期には台湾の政治構造が大きく変化した。政治勢力が台湾アイデンティティの強い与党陣営（グリーン陣営）と「中華民国」意識の強い野党陣営（ブルー陣営）とに再編され，さらにメディアの色分けも進んで,両陣営が鋭く対立する構図ができた。こうした状況下では，野党陣営に蓄積された，腐敗と思しき行為や事象の「経験」と「知識」は，民進党政権を攻撃する格好の材料となる。「情報」を「提供」しさえすれば，あとは野党陣営寄りのメディアを使って，金銭スキャンダルを暴露することなど容易である。ましてや，クリーンさを売り物にしていた陳水扁総統や民進党政権の金銭スキャンダルともなれば，腐敗への意識を高めている市民に与えるインパクトたるや絶大である。それは目に見える形で政権への支持率に反映されることになった[4]。そして，民主化に伴い機能を回復させた司法制度の下で,スキャンダルが違法行為であるかどうかが問われることになった。いずれにせよ，以上の諸要因は，台湾で腐敗が拡大したという一般的な認識を生み出すのに寄与したといえよう。

Ⅱ　腐敗と民主主義の政治学

１．グローバルな問題としての腐敗

1990 年代以降，冷戦の終焉と経済のグローバル化を背景に，腐敗という問

[3] 政権交代後，民進党の議員は露骨にカネを要求してくるので「行儀が悪い」という民進党の支持者の声もあったという（『週刊台湾通信』2005 年 11 月 3 日）。
[4] 呉淑珍夫人起訴直後の世論調査では，陳水扁総統の支持率は前月中旬の 23%から 16%に急落，辞職を求める意見は 60%と過去最高を記録した（『聯合報』2007 年 11 月 4 日）。

題に対する国際的な関心が高まっている（Williams [1999]）。腐敗という現象は，ある特定の地域や政治体制だけに見られるものではなく，今やグローバルな問題であると認識されており，経済発展や社会発展にとって最大の障害であると考えられている（World Bank [2007]）。

腐敗は，開発の政治経済学や民主化の政治学への理解を深めるうえでも，重要なテーマとなっている。最近の研究では，腐敗がどのように発生し，それが各国の政治・経済システムにどのような影響を与えるのか，といった問題が検討されている。かつて，途上国における腐敗は，経済的には投資を促し経済発展に寄与するものと考えられ，政治的にも安定した政治発展を実現するための必要悪であると捉えられていた。しかし，そうした腐敗に対する見方は，今や 180 度転換されたといってよい。経済学の分野では，腐敗は経済発展に寄与するどころか，むしろそれを阻害するものであり[5]，とりわけ第三世界の最貧国に深刻な打撃を与えてきたと考えられている（Gray, Sheryl W. and Daniel Kaufmann [1998]; Williams [1999]）。経済学者の眼から見た腐敗とは，経済という歯車の回転を悪くする「砂利」のようなものなのである（Seligson [2002]）。また，政治学の分野でも，民主主義の価値を汚すものであり，新興民主主義にとって共通の，大いなる障害であると考えられている（Andreas, Diamond, and Plattner(eds.) [1999]）。

２．腐敗を生み出す要因

政治学における腐敗に関する研究は，民主主義の下での腐敗が発生する要因を探るものと，腐敗が民主主義に及ぼす影響を考察するものに大別できる。まずは，腐敗の発生要因についての研究を概観する。

腐敗の発生要因についての研究は，社会現象としての腐敗がなぜ起こるのかという点に注目し，全体的なレベル（aggregate-level）での要因を明らかにする研究と，システムないし制度がどのように個々の政治家を腐敗へと向か

[5] 最近の研究では，厳密な実証データに基づいて，腐敗と様々なマクロ経済指標との間にはネガティブな関係があることが検証されている（Lambsdorff [1999]）。

わせるのかを理解するために，個人レベル（individual-level）の要因を考察する研究とに分けられる（Chang [2005]）。

全体的なレベルでの研究では，経済への国家の介入，民主化，政治的アカウンタビリティ，政治制度，経済的な競争，グローバル化といった要因が腐敗を生み出すと指摘されている（Ades and di Tella [1999]; Chang [2005]; Gerring and Thacker [2004]; Rose-Ackerman [1999]; Sandholtz and Gray [2003]; Wayland [1998]）。例えば，経済への国家の介入という要因は，官僚や政治家に膨大な資源を分配する広範な裁量が与えることで，贈収賄が行われる大きな機会を生み出すとされる（Kaufmann [1997]）。この論理に従えば，規制緩和などの自由化が行われると，腐敗はその機会が失われて自ずと姿を消すことになる。ところが，現実はそうではない。例えば，新自由主義改革が断行されたラテンアメリカ諸国では，むしろ腐敗が拡大したのである（Manzetti and Blake [1996]）。規制緩和が新たな規制を生み出すことは指摘されているし（Vogel [1996]），自由化改革を実施するのが国家である以上，国家の介入は自由化の過程でも増大し，それはまた腐敗の機会を拡大させることになる。例えば，国営企業の民営化は，莫大な資源の再分配への裁量を官僚や政治家に与えることになる。賄賂と引き換えに，官僚や政治家は払い下げ価格を引き下げたり，独占や寡占が形成されるように，民営化された企業のために市場条件を操作したりすることもできる。それがまたさらなる賄賂の獲得につながるかもしれない（Wayland [1998]）。自由化の過程においても，国家の介入によって腐敗が発生する機会は生まれるのである。

ただし，機会が存在するだけでは，実際に腐敗が起こるとは限らない。また同じ条件の下で，なぜ腐敗に手を染めた政治家もいれば，そうでない政治家もいるのかを説明することができない。したがって，全体的なレベルでの分析は，腐敗へと政治家を駆り立てるインセンティブに注目するような，個人レベルでの要因を体系的に考察することで補完される必要がある。腐敗とは，構造的要因と個人の選択による産物である。腐敗の要因を十分理解するためには，構造的・制度的な制約と個人の選択との双方を視野に入れなけれ

ばならないのである（Chang [2005]）。

個人レベルの要因としては，選挙における不確実性の反腐敗効果が指摘されている。選挙における競争が腐敗を抑制するという議論である。選挙での競争は，政治家の当選の見込みに対する不確実性を増大させるため，政治家は落選を恐れて腐敗に関与しなくなるという。選挙での競争が懲罰装置として機能し，有権者に腐敗に手を染めた政治家を取り替えるための手段を与えることになる。さらに，現職に対抗する対立候補者は，現職の不正行為を発見し，暴露しようとするインセンティブをもつため，選挙での競争は不正行為が暴露される危険性を高めることにもなる（Drury, Krieckhaus, and Lusztig [2006]）。

しかし，チャン（E.Chang）は，こうした議論は選挙制度の違いから生じる競争のあり方の違いを考慮していないと指摘する（Chang [2005]）。選挙制度は政治アクターの選挙での行動を規定するが，現職の政治家の行動に影響を与えるのは，競争が政党内で行われるか，政党間で行われるのかの違いである。政党内競争が中心となる場合，候補者は政党の評価に依存するよりも，むしろ彼個人への票（personal votes）を集めることが重要となる（Ames [1995]; Chang [2005]; Samuels [1999]）。

候補者個人に対する評判が政党に対する評価よりも重要となる選挙制度は，より腐敗で特徴づけられる傾向がある。選挙での個人に対する票への依存度が高まると，候補者は彼個人の立候補を宣伝するためにより多くの選挙資金が必要となる。選挙のコストが高まることで，候補者はたとえ違法な形であっても，より多くの選挙資金を手に入れようとする。当選の可能性に関する不確実性が高まるにつれて，候補者の彼個人に対する票への依存も強まる。候補者が選挙の情勢について悲観的になればなるほど，彼は当選するために彼個人に対する票を集めるのに躍起になるし，結果的に不正な資金に手を出す可能性が高まる。

要するに，個人に対する票が重要となる選挙制度の下では，選挙での不確実性が政治家を不正行為へと駆り立てるのである。日本や台湾で採用されて

いた中選挙区制，非拘束名簿式比例代表制を採用している国々など，選挙の結果が個人に対する票によって決まる選挙制度に関する実証研究からは，同様の知見が得られている。日本やブラジルにおける金権政治や腐敗の拡大において，候補者本位の選挙活動が重要であると指摘する研究も存在している（Ames [1995]; Chang [2005]; Cox and Thies [1998]; Geddes and Ribeiro Neto [1992]）。

このほか，ウェイランド（K.Weyland）は，個人レベルの要因として，政治リーダーの政治戦略やスタイルを指摘している。彼によれば，ラテンアメリカのネオポピュリズムでは，個性的な魅力を持ったリーダー（personalistic leaders）が，既存の政党や利益団体を迂回して，頻繁にテレビを活用するやり方で直接大衆にアピールし支持を広げようとした。そうした手法はコストがかかるため，「メディア・ポリティクス」とか「テレ・ポリティクス」と呼ばれるメディア戦略を重視した政治では，野心的な政治家を腐敗へと向かわせるインセンティブがさらに高まるのだと述べている（Wayland [1998]）。

３．腐敗がもたらす影響

腐敗がもたらす影響について，政治学者は両面価値的な見方を示してきたといえる。例えば，ハンチントン（S.Huntington）は，腐敗のポジティブな側面を指摘している。腐敗は，途上国においては官僚制度を機能させる「潤滑油」であり，社会統合機能を果たすものであり，安定した政治発展を実現するための必要悪なのである（Huntington [1968]）。

もう一つの見方は，腐敗のネガティブな側面に焦点を置いたもので，クライアンティリズムやクローニズムの有害な効果に注目している。ジョンストン（M.Johnston）によれば，クライアンティリズムと，それに関連した選挙買収や賄賂などの腐敗は，パトロンとクライアントとの信頼を増幅させるものだとしても，政治システムへの信頼を低下させるものだという（Johnston [1979]）。

しかし，民主化の「第三の波」が世界に広がり，途上国に広く新興民主主

義が誕生している今日，腐敗がかなり違った角度から捉えられるようになってきた。最近の研究は，過去の政治学者による腐敗に対する見方に，強く異議を唱えるものとなっている。腐敗は，独裁の下ではポジティブな機能を果たしたのかもしれないが，民主主義の下では，特に政治システムへの信頼という点に関してネガティブな影響をもたらすと考えられている（Seligson [2002]）。腐敗とは，政治家が市民から信託された権力を，私服を肥やすために濫用することであり，それゆえに市民の政治制度に対する信頼の低下を招くことになる（Doig and Theobald [2000]）。この腐敗の信頼侵食効果（trust-eroding effect）は，市民の政治不信を引き起こし，さらには政治システムの正統性の危機へとつながる（Seligson [2002]）。腐敗は，「民主主義の定着にとっての脅威」というわけである（Diamond [1999]; Diamond and Morlino [2005]; Guillermo O'Donnell, Jorge Vargas Cullell, Osvaldo M. Iazzetta, and Jorge Vargas Cullel(eds.) [2004]）。

この数年，腐敗の信頼侵食効果に関する実証研究が蓄積されている（della Porta [2000]; Anderson and Tverdova [2003]）。腐敗の政治的コストの大きさが明らかにされ，腐敗は「潤滑油」であるとする見方は真っ向から否定されている。デラ・ポルタ（D.della Porta）は，腐敗が政府のパフォーマンスの妨げとなるため，政府の能力に対する市民の信頼を低下させることになると指摘する。腐敗は，大衆の利益の表出と集約を歪めるだけでなく，腐敗から得られる限界利益が最大化される領域に,行政の資源や活動を振り向けてしまう。しかし，そうして資源が誤って分配されている間に，全体の福祉が提供されているかどうかは考慮されない。大衆はコストの増大や劣悪な公共事務など腐敗の外部性に苦しめられるため，彼らが犠牲にされることになる。政府のパフォーマンスの悪さが，制度や公共手続きの効率性や公平性に対する批判を広く引き起こすとすれば，腐敗が制度に対する信頼を低下させても驚くべきことではない。

しかも，腐敗の影響はますます強まっていくのだという。腐敗は，市民の関心事に対する政府の対応能力への信頼を低下させるが，そうした制度への

信頼の欠如がまた，政策決定者へのアクセスを得るために市民を贈賄へと駆り立てることとなり，さらに新たな腐敗を生み出すことになるのである（Della Porta [2000]）。

腐敗は，公平性，透明性や公正といった民主主義の基本的な価値に背くだけでなく，一般には民主制度の正統性，特にその根幹となる制度に対する信頼の土台を切り崩すことによって，民主主義の崩壊の可能性を高めると考えられている。それは「新興民主主義の定着にとっての大きな障害」であり（Andreas, Diamond and Plattner(eds.) [1999]），新興民主主義国で体制の正統性を高まるためには，腐敗を防止することが選挙や人権よりもはるかに重要である，という指摘すら存在している（Seligson [2002]）。

Ⅲ　東アジアの腐敗は例外なのか

１．「東アジアの逆説」

東アジアでは，深刻な腐敗が高度な経済成長が結びついてきた。そうした腐敗と成長との共存は「東アジアの逆説」（the East Asian paradox）と呼ばれ（Wademan [2002]），東アジアの腐敗をユニークだとか，例外的だとする見方を裏付けるものとなっている。東アジアの腐敗の例外主義は，経済的のみならず，政治的にも妥当であるといえるのだろうか。東アジアでは，腐敗は民主主義とも共存しているのだろうか。

ウェイドマン（A.Wademan）によると，東アジア諸国における成長率はOECD 諸国の２倍であるが，腐敗のレベルも２倍になっているという。この点に注目した彼は，「東アジアの奇跡」（the East Asian miracle）のもう一つの別の側面として，それは「腐敗は経済発展を阻害する」という経済学の古典的知見に対するアンチテーゼを示しているのだと指摘している（Wademan [2002]）。

近年，そうした逆説を解明する研究が進められている。多くの研究では，東アジアで腐敗と成長が両立しえた要因が，その独創的な経済政策，および

国家とビジネスとの関係に求められている。例えば，国家の介入はレントと腐敗を生む可能性があるものの，そうしたレントが経済的に非効率な結果につながるかどうかは，レントがどのように分配され，使われるのかによるといわれる。東アジア諸国では，レントは周到に計画され，実施された産業政策によって創り出され，企業に対して実績ベースで競争的に分配されたものだった。そのため，東アジアでは，レントとそれに関わる腐敗は必ずしも成長を阻害するものではなかったのである（Khan and Jomo [2000]）。

注目されるのが，カン（D.Kang）の研究である（Kang [2002a]; Kang [2002b]）。彼は，政府とビジネス界の間における腐敗やクローニズム，レント・シーキングといった金権政治に焦点を当てて，東アジアの開発志向型国家が経済発展をどのように実現したのかを説明している。彼の議論によると，「東アジアの逆説」を説く鍵は，国家とビジネス界のあり方とその関係，とりわけ統治エリートと企業家との関係にある。韓国を例にとると，政治資金を必要とした統治エリートと，何らかの政策的優遇を得ようとする財閥（チェボル）の利害が一致し，互いに相手を人質にするようなもたれ合いの関係（mutual hostages）が形成された。しかし，両者の権力が均衡していたため，結託しながらも，過度なレント・シーキングには至らなかったのだという。そこでは，統治エリートが選ばれたビジネス・エリートに対して，成長促進的な投資環境や安価な公共リソースを与えることで彼らの経済的利益を増進させ，ビジネス・エリートはその見返りに，統治エリートが権力の座にあるために必要な政治資金を彼らに援助するのである。そうした状況下では，統治エリートは彼らの権威を保持し，より多くの資金（賄賂）を回収する目的から，経済成長を奨励しようとする。要するに，政府とビジネス・エリートが少数かつ安定的で，双方の権力が均衡している場合には，金権政治は取引費用を引き下げることができ，長期的な投資を効率的なものにするのである。

いずれにせよ，東アジアの腐敗は，他の地域の場合と異なり「開発的」であり，そのことが成長との両立を可能にしたのだと考えられているのである。

２．東アジアの腐敗と民主主義

「東アジアの逆説」の議論は，他地域と東アジアとの腐敗がもたらした効果の違いを論じている。もし東アジアの腐敗がユニークなもので，例外的なものだとすれば，民主主義との関連で考えた場合にも，同じことが言えるのだろうか。東アジアの腐敗は制度に対する信頼とも両立するのだろうか。

政治文化が異なれば，ある文化において倫理的に好ましくない，あるいは腐敗であると看做される事象が，別の文化では日常的なごく普通のやり取りなのかもしれない，ということは想像に難くない。東アジアの政治文化には，制度への信頼に対して腐敗がもたらす効果を相殺しうるものがあるのだろうか。例えば，フクヤマ（F. Fukuyama）は，アジアにおける儒教的価値観は民主主義思想と両立できないと指摘している（Fukuyama [1998]）。また，リプセットとレンス（S.Lipset & B.Lenz）は，アジア文化では集団責任が重視されていることが腐敗につながりやすいという（Lipset and Lenz [2000]）。もしそうだとすれば，アジアの政治文化のなかで，パターナリズム的な価値観の影響を強く受けてきた市民は，政治的権威に対して盲従するがゆえに，腐敗の有無に関わらず，彼らの制度に対する信頼は損なわれないとも考えられる。

また，腐敗とは一般に私的利益のための公権力の濫用と定義されるが，この定義は市民が公的役割と私的役割との区別を明確に認識していることが前提になっている。しかし，東アジアの腐敗の例外主義を唱える人々は，東アジア諸国ではそうした区別が必ずしも存在するわけではないと主張している。なぜなら，アジアでは，政治的権威を有する者と市民との間で贈答という行為が重視されるように，互恵主義の考え方が非常に重要だからである（Rose-Ackerman [1999]）。東アジア諸国では，腐敗が誰にでも受け入れられる習慣と看做されるような政治文化によって人々が社会化されているために，腐敗が起こったとしても，そのことで人々が政治制度に対して何らかのネガティブな態度を示すわけでもなく，ごく当たり前のこととして捉えられるのだとする見方は，かなり説得力を持つものかもしれない。

さらに，東アジアの民主主義のユニークな現象として指摘されるのが，腐

敗した政治家がかなり高い頻度で当選，あるいは再選されることである。例えば，ネイザン（A.Nathan）によると，莫大な資金を有する腐敗した候補者が選挙で勝てるのは，東アジアの選挙が候補者個人の魅力が非常に重要となる候補者本位の選挙だからである（Nathan [1993]）。候補者本位の選挙制度の下では，選挙戦を戦う上では個人の評判が政党に対する評価よりも重要であるため，合法的な立法上の個別主義（例えば，クライアンティリズム）から違法な票の買収に至るまで，政治家は有権者に支持を訴えるために利益誘導を行おうとする（Budd [2004]）。その結果，選挙ではカネがばら撒かれ，スキャンダルや腐敗で彩られるものの，市民は腐敗した政治家にいたって寛大であり，繰り返し票を投じるのである。

すでに見たように，理論的にも実証的にも，制度への信頼に対して腐敗がもたらす影響を考察した研究では，腐敗には信頼侵食効果があることが明らかにされてきた。しかし，アジアでは政治文化や選挙政治といった要因によって，そうした腐敗の効果が相殺されるかもしれない。また，これまでの研究は，先進民主主義国や東欧，ラテンアメリカの新興民主主義国を対象としたものが中心であることから，そこから得られた知見が，アジア諸国にどの程度妥当するのかという問題も提起されよう。こうした課題に取り組んだのが，チャンとチゥー（E. Chang with Y. Chu）である（Chang with Chu [2006] ）。

彼らの研究は，アジア諸国における制度への信頼に対する腐敗がもたらす影響を分析した体系的な比較研究である。アジアン・バロメーターのデータをもとに，アジアの民主主義において，市民の腐敗に対する認識のレベルが，彼らの政治制度に対する信頼を低下させているのかどうかを検証した。その結果，アジアの民主主義国に共通して，腐敗の強い信頼侵食効果があることが明らかにされた。しかし，アジアの政治文化や選挙政治が，市民の制度への信頼に対する腐敗のネガティブな効果を相殺するものだということは確認できなかった。さらに，腐敗と制度に対する信頼との間の因果関係の方向性についても，腐敗と信頼が互いに補強し合う悪循環が起こっていることが示された（Chang with Chu [2006]）。

このように，政治的には，東アジアの腐敗の例外主義は成り立たない。他の地域の場合と同様に，東アジア諸国でも腐敗は民主主義の定着にとっての脅威であると捉えられているのである。

おわりに

以上，腐敗をめぐる研究について概観したが，それを踏まえて今後の研究の課題について示しておきたい。腐敗がもたらす影響は，台湾の事例についてもほぼ明らかにされているといえよう。腐敗は台湾の新興民主主義の定着にとっての脅威であり，民主主義の正統性が脅かされる可能性が存在している。実際，台湾と韓国における民主主義に対する支持の度合いは，その他の深刻な困難に見舞われている新興民主主義国と比較しても，かなり低いことが示されている（Chu, Diamond, and Shin [2001]; Chu and Shin [2005]）。

一方，腐敗を生み出す要因については，今後の研究課題となる。あらゆる政治システムで，腐敗の原因，そのあり方や影響は異なっているし，腐敗は構造的な要因と個人の選択による結果である。したがって，今後の１つの方向性としては，既存の腐敗研究の理論的知見を踏まえながら，個別事例の背景を丹念に考察し，最終的に台湾の腐敗の姿を描き出す必要があると思われる。

もう１つの重要な方向性といえるのが，陳水扁政権期のパトロネージやクライアンティリズムのあり方を考察することである。概念上の区分として，腐敗は違法行為であるのに対し，パトロネージは，政治家や官僚があくまでも合法的に，彼らの裁量の範囲内で関係者や追従者に優遇を与えるものであると指摘されている（Wayland [1998]）。実際に，両者を区別するのは難しい。しかし，腐敗のみに焦点を当てると，台湾の金権政治の全貌を捉えそこなう危険性がある。パトロネージやクライアンティリズムは，国民党政権期の台湾を理解するうえで重要な要素であった。したがって，国民党政権期に存在したシステムが，陳水扁政権下でどのように再編されたのかを分析すること

が，今後の大きな研究課題となる。

【参考文献】

＜英語＞

Ades, Alberto, and Rafael di Tella [1999], "Rents, Competition and Corruption," *American Economic Reveiw*, 89(4), pp.982-94.

Ames, Barry [1995], “Electoral Strategy under Open-List Proportional Representation,” *American Journal of Political Science*, 39 (2), pp. 406-433.

Anderson, Christopher, and Yuliya Tverdova [2003], “Corruption, Political Allegiances, and Attitudes toward Government in Contemporary Democracies,” *American Journal of Political Science,* 47 (1), pp. 91-109.

Andreas, Schedler, Larry Diamond and Marc F. Plattner eds., [1999], *The Self-Restraining State: Power and Accountability in New Democracies*, Boulder: Lynne Rienner.

Bardham, Pranab [1997], “Corruption and Development: A Review of Issues,” *Journal of Economic Literature,* 35, pp.1320-1346.

Budd, Eric [2004] *Democratization, Development, and the Prtrimonial State in the Age of Globalization*, Lanham: Lexington Books.

Chang, Eric C. C. [2005], “Electoral Incentives for Political Corruption under Open-List Proportional Representation,” *The Journal of Politics,* 67 (3), pp. 716-730.

Chang, Eric C.C. with Yun-han Chu [2006], “Testing Asian Corruption Exceptionalism: Corruption and Trust in Asian Democracies,” *The Journal of Politics*, 68 (2), pp. 408-433.

Chu, Yun-han, Larry Diamond, and Doh Shin [2001], “How People View Democracy: Halting Process in Korea and Taiwan,” *Journal of Democracy,* 12

(1), pp.122-136.

Chu. Yun-han and Doh Chull Shin [2005], "South Korea and Taiwan," in Larry Diamond and Leonardo Morlino eds., *Assessing the Quality of Democracy*, Maryland: The Johns Hopkins University Press, pp.188-212.

Cox, Gary and Michael Thies [1998], "The Cost of Intraparty Competition: The Single, Nontransferable Vote and Money Politics in Japan," *Comparative Political Studies*, 31 (3), pp.267-292.

della Porta, Donetella [2000], "Social Capital, Beliefs in Government, and Political Crupution," in Susan J. Pharr and Robert D. Patnum, *Disaffected Democracies: What Troubling the Trilateral Countries?*, Princeton: Princeton University Press, pp.202-228.

Diamond, Larry [1999], *Developing Democracies: Toward Consolidation*, Maryland: The Johns Hopkins University Press.

Diamond, Larry and Leonardo Morlino eds., [2005], *Assessing the Quality of Democracy*, Maryland: The Johns Hopkins University Press.

Doig, Alan and Robin Theobald [2000], *Corruption and Democratization*, London: Frank Cass.

Drury, A. Cooper, Jonathan Krieckhaus, and Michael Lusztig [2006], "Corruption, Democracy, and Economic Growth," *International Political Science Review*, 27 (2), pp. 121-136.

Fukuyama, Francis [1998], "Asian Values and Civilization," The ICAS Lectures, No.98-929-FRF（http://www.icasinc.org/f1998/frff1998.html）.

Geddes, Barbara, and Artur Ribeiro Neto [1992], "Institutional Sources of Corruption in Brazil," *Third World Quarterly*, 13 (4), pp. 641-661.

Gerring, John and Storm Thacker [2004], "Political Institution and Corruption: The Role of Unitarism and Parliamentarism," *British Journal of Political Science*, 34 (2), pp. 295-330.

Gray, Sheryl W. and Daniel Kaufmann [1998], "Corruption and Development,"

Finance and Development, 35 (1), pp. 7-10.

Haggard, Stephan and Robert Kaufman, [1995], *The Political Economy of Democratic Transitions*, Princeton: Princeton University Press.

Hsueh, Chao-yung [2007], "Power and Corruption in Taiwan," *Issues and Studies*, 43 (1), pp. 1-40.

Huntington, Samuel P. [1968] *Political Order in Changing Societies*, New Haven and London: Yale University Press.

Johnston, Michael [1979], "Patrons and Clients, Jobs and Machines," *American Political Science Review,* 73 (2), pp. 385-398.

Kang, David [2002a], "Bad Loans to Good Friends: Money Politics and the Developmental State in South Korea," *International Organization,* 56 (1), pp.177-207.

Kang, David [2002b], *Crony Capitalism: Corruption and Development in South Korea and The Philippines*, Cambridge: Cambridge University Press.

Kaufmann, Daniel [1997], "Corruption: The Fact," *Foreign Policy,* 107 (Summer), pp.114-131.

Khan, Mushtaq and Kwane Sundaram Jomo [2000], *Rents, Rent-Seeking and Economic Development: Theory and Evidence in Asia*, Cambridge: Cambridge University Press.

Lambsdorff, Johann [1999], "Corruption in Empirical Research: A Review," TI Working Paper, Transparency International.

Lipset, Saymour, and Babriel Lenz [2000], "Corruption, Culture and Markets," in Lawrence Harrison and Samuel P. Huntingtong eds., *Culture Matters*, New York: Basic Books, pp.112-124.

Manzetti, Luigi and Charles H. Blake [1996], "Market Reforms and Corruption in Latin America: New Means for Old Ways," *Review of International Political Economy,* 3 (Winter), pp.662-697.

Nathan, Andrew [1993], "The Legislative Yuan Elections in Taiwan: Consequences

of the Electoral System," *Asian Survey,* 33 (April), pp.424-438.

O'Donnell, Guillermo, Jorge Vargas Cullell, Osvaldo M. Iazzetta, and Jorge Vargas Cullel eds. [2004], *The Quality Of Democracy: Theory And Applications*, Notre Dame : University of Notre Dame Press.

Rose-Ackerman, Susan [1999], *Corruption and Government: Causes, Consequences, and Reform*, Cambridge: Cambridge University Press.

Sandholtz, Wayne, and Mark Gary [2003], "International Integration and National Corruption," *International Organization,* 57 (4), pp. 761-800.

Seligson, Mitchell A. [2002], "The Impact of Corruption on Regime Legitimacy: A Comparative Study of Four Latin American Countries," *The Journal of Politics*, 64 (2), pp. 409-410.

Samuels, David J. [1999], "Incentives to Cultivate a Party Vote in Candidate-Centric Electral Systems: Evidence from Brazil," *Comparative Political Studies*, 32 (4), pp. 487-518.

Vogel, Steven K. [1996], *Freer Markets, More Rules: Regulatory Reforms in Advanced Industrial Countries*, Ithaca: Cornell University Press.

Wademan, Andrew [2002], "Development and Corruption: The East Asian Paradox," in Edmund Terence Gomez ed., *Political Business in East Asia*, London and New York: Routledge, pp.34-61.

Wayland, Kurt [1998], "The Politics of Corruption in Latin America," *Journal of Democrac*y, 9 (2), pp. 108-121.

Williams, Robert [1999], "The New Politics of Corruption," *Third World Quarterly,* 20 (3), pp. 487-489.

World Bank [2007], "Overview of Anticorruption Continued…," (http://web.worldbank.org/).